

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとの弟子、という相論のそうろうらんこと、もってのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずそうろう。そのゆえは、わがはからいにて、ひとに念仏をもうさせそうらわばこそ、弟子にてもそうらわめ。ひとえに弥陀の御もよおしにあずかって、念仏もうしそうろうひとを、わが弟子ともうすこと、きわめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともない、はなるべき縁あれば、はなるることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなんどいうこと、不可説なり。如来よりたまわりたる信心を、わがものがおに、とりかえさんともうすにや。かえすもあるべからざることなり。自然のことわりにあいかなわば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々

北第3組 即信寺住職

第6章 念仏の僧伽

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

『歎異抄』の第四章から第六章までは、念仏の行者における利他ということが課題にされていますが、第六章においては「わが弟子、ひとの弟子」という問題を通して、念仏の僧伽の内実が確かめられています。

宗祖は、自らの信心を「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と表白されました。つまり「私は、念仏にしたがい、念仏に育てられ、念仏に導かれる人生に不足なし」というのが、第四章から第六章まで一貫する宗祖における「我が信念」です。

その信念は、師・法然との出会いによってもたらされたことですが、その背景には、釈尊以来の無数の仏者の教示や七高僧の伝統があり、さらには吉水での朋友との出会い、越後や関東でのいなかの人々との触れ合いの中でその領きは開かれていったのです。

有縁の人々との出会いを通して仏弟子の座を賜わることができたという事実において、宗祖は「真の仏弟子」を「弟子とは釈迦・諸仏の弟子なり」と了解されました。故に、この了解は教理的解釈ではなく、仏弟子として無数の諸仏に導かれ続けていく自身を賜ったという慶びと謝念に由来するものです。

さらに宗祖は、比叡山での自力修行の挫折や念仏弾圧の法難さえも自らに念仏の確かさを知らせてくれた宿縁であったと戴かれます。

痛むべき現実を通して、どこまでも煩惱具足の凡夫としてしか生き合うことができない人間業の悲しさを知らされ、同時に本願によらなければ救われない一切衆生の身の事実を教えられたのです。

念仏の行者における「利他」とは、私が人を教えて救うのではなく、業苦に沈む人間の悲しみと出会い続けるということであり、いよいよ「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という自らの歩みを見失わないことにほかなりません。

本願力によって一切衆生が救われていく道こそが、唯一の法爾自然の道であることに領けるならば、自らが仏恩と師の恩の中に生きていたことがおのずから知らされるのです。それが念仏者における「仏法の成就とは僧伽の成就」といわれることの内実なのでしょう。

私たちは同じ宗門とか同じお寺で共に教えを聞く仲間が僧伽だと考えてしまっていますが、僧伽とは決して組織でもなく、まして気の合う者の集まりが僧伽であるはずはありません。いかなる場においても仏との出会いがあり、法に対する敬いがあり、仏法を勧める師友との出会いが開かれているかどうか、自らが「念仏に育てられることに不足なし」と領ける仏弟子と名告ることができるかが問われているのでしょうか。そこに僧伽的人間として真に解放された私一人が誕生することが求められているのです。それを見失うなら、どんな場に身を置いたとしても「わが弟子、ひとの弟子」という思いに振り回されるのです。

しかし、その教えを聞き続けていた関東の門弟たちの中にも「わが弟子、ひとの弟子」という相論が起こってきたことに自我の無涯底なることが知らされます。

宗祖もまた『信巻』における「真仏弟子」の結積において「悲しきかな、愚禿鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の太山に迷惑して、定聚の数に入ることを喜ばず」と言われ、「名利に人師をこのむなり」とも悲歎されています。仏法の名において他を私有し支配する。そこに自他ともに人間を失っていかざるをえないという慚愧、しかし、その慚愧こそがまた新たなる歩みを開くのです。

なぜならその私に向かって、すでに仏の方から真に開かれた関係存在、共に生きる関係存在の具体性が浄土のはたらきとして教えられているからです。それが他力回向の救済であり、故に「普共諸衆生 往生安楽国」という願生心が発起するのです。不思議にも慚愧において大悲の確かさを仰いでいけるのです。